

第4回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【佳作】

「豆まき」 東京都 平野由希子

祖父は昔からの習わしを大切にする人だった。季節の行事なども人任せにせず全部

自分でやっていた。正月の松飾や小正月に飾る餅花や団子も自分で用意し飾りつけをしていた。

節分の豆まきも、自ら率先してやっていた。

夜、祖父の家に行くと、すでに飴玉や金平糖や落花生などが入ったザルが用意されていて、祖父がその前に座っている。みんなが集まるのを見計らって祖父が立ち上がり、お菓子の入ったザルを持って座敷に行く。みんながそのあとからゾロゾロついて行く。

お菓子をわしづかみにしながら、祖父が、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまくと、みんながワッとばかりに飛びつく。座敷に仁王立ちになり、ぶっきらぼうな口調で、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまく祖父の姿は、なかなか威厳のあるものだった。

子どもだけでなく、大人も一緒にお菓子をひろいだが、わたしの母などは前掛けを広げ、子どもたちを押し退けるようにしながら拾い集めていたものだった。

当時、私のむらではどこの家でもこのようなことをそれぞれの家でやっていた。祖父も子どもたちをよろこばしてあげたいという気持ちも少しあったかもしれないが、昔からの習わしを家長の務めとしてやっていただけであったのかかもしれない。

祖父は私が十一歳のとき亡くなった。気難しい人で子どもには近寄りがたいところがあったが、意外に自分の中で大きな存在であったことを知ったのは、自分も子の親となり、

昔のことを ^{おもいだ} 思い出すようになってからだった。

自分の子ども ^{じだい} 時代を思い出すたび、その中にいつも祖父がいたことを思うとき、その存在の大きさに ^{あらた} 改めて思いをいたすのである。

祖父に ^{なら} 倫い、自分も昔の習わしを子どもたちに伝えようと思い、節分の日にお菓子やキャラメルなどを用意し、「鬼は外。福は内」と豆まきをやるようになった。最初、キャッキヤッと言いかながら喜んでいた子どもたちも、だんだん ^{ねんれい} 年齢が上がるにつれて親の思いつきに付き合ってくれている様子がみてとれたので、お菓子と一緒に十円玉や百円玉を紙に包んでまくと、俄然、顔つきが変わり、上の娘などは十円玉には目もくれず百円玉に ^{ねら} 狙いを定め、必死の形相で拾い集めていた。さらに五百円玉を数枚加えると、夫も参加し、腹ばいになり、子どもたちを押しのけるようにしながら両手を広げ、手当たり次第にかき集めていた。

下の息子はまだ小さかったので、楽しそうにお菓子を拾っていたが、その息子が小学校高学年になり、「来年からもうやらなくともいいよ」と宣言したので、我が家の中行事も自然消滅のような形で終わりを告げた。

祖父が亡くなつてからすでに半世紀が過ぎた。歳月とともに記憶は日々色褪せていくが、座敷に仁王立ちになり、ぶっきらぼうな口調で、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまいていた祖父の姿は、いまも鮮明に心に焼きついている。